キリスト教神学・自然科学・宗教

——境界を跨る

Seungchul KIM(金承哲 : Prof. Nanzan University)

sechkim@gmail.com

(日本) 南山大学人文学部教授、南山宗教文化研究所所長。著書『速藤周作と探偵小説：痕跡と追跡の文学』(東京：教文館, 2019)、『엔도 슈사쿠: 흔적과 아픔의 문학』(ソウル: 비아토르, 2017)、『無住와 放浪: 기독교신학의 불교적 상상력』(ソウル: 동연출판사, 2015)、『벚꽃과 그리스도: 문학으로 보는 일본 기독교의 계보』(ソウル: 동연출판사, 2012)、『神と遺産: 遺産工芸時代におけるキリスト教』(東京：教文館, 2009)他。

The Permeable Boundaries Between Theology, Science and Literature

Christian theology as a form of self-understanding of the Christian faith has always emerged in specific hermeneutical situations. In this sense, the form and content of theology evolves through its encounter with the various activities of human beings that we can in sum call “culture.” Paul Tillich, the famous theologian of the last century, defines the relation between religion, a central component of which is theology, and culture as follows: “Religion is the substance of culture, culture is the form of religion.” This formulation suggests that religion and culture find themselves in a reciprocal relationship with each other. Throughout its history, Christian theology has tried to provide an answer to the ultimate human questions about the meaning of life and death, the mystery of the existence of all things, including human beings, and other central issues. The act of engaging in theology was made possible by its opening itself up to the permeable boundaries between theology, philosophy, science, literature, the arts, and all other aspects of culture. In fact, the core of

theology is only to be found in such openness to the interpenetration of fields of culture.

Keywords Theology(神学), Religion(宗教), Science(科学), History(歴史), Crossing the Boundary(境界を超える)

キリスト教信仰の自己理解としての神学は、ある特定の場所において遂行されるものである。人間の生き方・あり方としての「理解」という行為をめぐる解釈学的省察が示すように、「理解」はいつもある特定の場所や地平において行われるからである。言うまでもなく、その「場所」とは、地理的・歴史的・文化的・宗教的なものの総合体として成り立つものである。そうであれば、それぞれの神学的試みには、それが成し遂げられるそれぞれの場所への自覚が含まれていなければならない。

ドイツ出身の神学者で「文化の神学」を唱えたことでよく知られているポール・ティリッヒ(Paul Tillich: 1886-1965年)は、自分の神学を「文化は宗教の形式であり、宗教は文化の内容である」というテーゼにまとめたことがある。すなわち、人間の究極的な関心事——生と死の意味、自分と世界の存在の意味や目的など——として宗教は文化という「場所」の中であらわれ、また形作られる。

また同様の文脈の中で、ティリッヒは、自分の神学的方法論を「相関関係の方法」と名付けた。人間の究極的関心事をめぐる問いが哲学的問いとするならば、それに対して答えようとするものが神学である、という意味である。ただしその際に誤解されてはいけないことは、神学は全ての問いに対する

答えをすでに自分のポケットの中に持っているように振舞ってはいけない、ということである。神学が文化の所産であるならば、その神学が提供しようとする答えというものも、やはり文化という場所の制約性をもつからである。

文化という場所こそ、歴史性の制約下のものであり、その文化と「相関関係」の中にある神学も、当然ながら歴史性という制約を受けている。こうしたことについての好例として、ティリッヒはキリスト教における救済観の変遷をあげて説明する。(ポール・ティリッヒ『存在への勇気(*Courage to be*)』参照。)

古代の人々にとって救いは、死の克服という人類の久遠の夢を反映するものであって、故に彼らにとって救いとは、体の永生不滅が実現されるところで求められた。しかしながら、「死を忘れるな(*memento mori*)」という知恵が逆説的に語るように、死は人間を人間たらしめる条件(*conditio humana*)の一つであって、どうしようもないものである。中世の人々にとっては救いとは、それゆえもう肉体の死を克服するところでは求められない。彼らがひたすら探し求めた救いは、最後の審判の時がきて皆がキリストの前に立たされるその時、果たして自分はキリストより何を言い渡されるのか、というところに求められた。キリストが私に差し伸べるのは、「(地獄の破滅へ導く)劔か、それとも(復活を意味する)白百合か」。つまり、中世人にとって救いは、自分の「罪」が赦されるところに求められたのである。

現代人の場合はどうだろうか。自然科学的世界像の洗礼を徹底的に受けている現代人にとって、肉体の不滅も、魂の復活も、そ

れが人間の限界状況を意味するからこそ、どうしても乗り越えることはできないことを知り尽くしている。だからこそ、それらは人間にとって限界状況であるとしか言えないものである。現代人を「死へ導く病」、それは生の無意味である。いくら合理性に徹したとしても、そこから生の意味は芽生えてこない。否、全てのところで合理性を貫いたからこそ、人生の意味はなおさら満たされないもの、虚しいものとして残ってしまう。救いとは、その無意味の空虚が意味によって充たされるところにある。

ティリッヒの話を長く述べたが、それは神学という営みが文化と呼ばれるものとの関連の中で成し遂げられるものであること、すなわち、神学は神学の内部と外部と考えられるものとの間の壁や境界を跨るものであるということを明らかにするためである。言い換えれば、キリスト教神学の自己同一性(アイデンティ)は、神学の内部と、普段神学以外のものと想定されるものとの間で形成されるものである。理論的な話とはかく、歴史的な例をいくつかあげてみよう。

キリスト教は、いわゆる「教理」という形で自分の信仰を内外に告白することによって、教会や信仰の組織化・体系化をはかろうとした。その中でもっとも中心的な教理といえば、やはりキリストが救い主であることを表明した「三位一体論」と「キリスト論」という教理であろう。それらは、それぞれニカイア公会議(325年)とカルケドン公会議(451年)で議論の末に公表された。そのような教理を定める過程において、当時の教会は、ギリシア哲学の観念を積極的に受け入れ、それによってキリスト教の信仰を言葉

にしたのである。著名な教会歴史学者のアドルフ・ヴォン・ハルナック(Adolf von Harnack: 1851-1930年)の用語を借りていうならば、それによってキリスト教は「ギリシア化(Hellenisierung)」の道を歩み始めたのである。(実はキリスト教の「ギリシア化」という現象は、すでにヘブライ語で書かれた旧約聖書がギリシア語に訳された時や新約聖書が書かれた時にすでに始まったともいえる)。最初の教理が作られてから、キリスト教とギリシア哲学との交流は長い間当然のことのように続けられてきた。

さて、中世が幕を下ろそうとした時に自然科学が歴史の舞台にあらわれ——実は自然科学の登場によって中世に終止符が打たれたとも言えるが——、キリスト教は、自然科学との出会いを通して自分の信仰を告白しなければならないとの課題が新たに与えられることになった。けれども、ギリシア哲学とは異なり、自然科学は、キリスト教にとってなかなか手に負えない相手であった。自然科学は、たとえそれがキリスト教の創造信仰に基づいて生まれたものであり、そういった点ではキリスト教の中庭から出たものではあろうが、キリスト教的な世界観・人間観を根本から揺らがすものである。「神は死んだ」というあの有名なニーチェの宣告は、近代の自然科学がもたらした、近代人のセリフである。今や人は、自分の価値判断の最後の砦であった神という「地平線」が消され、上と下、右と左の区分ができない暗闇の中をさまよう者になった。近代人とは、そのニーチェの宣言をむしろ「福音」として受け取る者に付けられた名称であろう。

19世紀になると、キリスト教神学は、も

う一つの厄介な(?)相手に出会ったことに気づき始めた。それは、長い間沈黙の中に封じ込められていたかのように見えた、キリスト教以外の宗教が、自分のことを主張しながら歴史の舞台に登場してきたのである。キリスト教は、「教会の外に救いなし(*Extra ecclesiam nulla salus*)」という教父キプリアヌス(3世紀)の言葉を援用し、キリスト教以外には救いの道が与えられていないと主張してきた。(実際、上記の標語によってキプリアヌスが語ろうとしたのは、司教の思想や方針に従おうとしないキリスト者への警告であって、決してキリスト教以外の宗教に対しての発言ではなかった。)しかしながら、キリスト教が形成される前にも、またキリスト教があらわれたその後も、宗教は人類の中で存続しており、それぞれの宗教に従う信者たちに「救い」(宗教によってその言葉は異なるにしても)の道を約束していた。しかも、キリスト教の自己理解としての伝統的神学は、こうした宗教という現象については何も知らないまま作られたものではないか。宗教がキリスト教に投げかける問題の深刻性は、先ほど述べた自然科学とほぼ同様なものであると言わざるを得ない。

それでは、21世紀のキリスト教神学が遂行される場所とはなんだろうか。21世紀の神学の場所は、宗教と自然科学が共に絡み合いながら働いている場所であるという点で、これまでに類似のない時代ともいえる。現代人は、自分たちの世界が、宗教的に多元化されていると同時に、自然科学的に理解されている、という事実を自覚しているのである。現代人が生きている場所、従って現代のキリスト教神学が遂行されるべき場所は、宗教的多元性への自覚と自然科学的

世界観によって作られている。それゆえ現代人は、2000年の間人類に救いの道を与えようとしてきたキリスト教とその自己理解としての神学について、「今・ここで」何をどのように語るのかという問いを投げかけている。「ここがロドス島である、ここで跳んでみろ!」(*Hic Rhodus, hic salta*)と。

キリスト教神学のアイデンティティは、以上で述べたとおり、自分と自分以外の間の境界を跨りながら形成されてきた。否、もっと正確にいうならば、神学とは神学と神学以外のものと想定されたもののハイブリット・雑種(hybrid)として存在するものである。それは、実は人間の自己同一性と同様である。人間とは、自分と他者の間のハイブリットとして生きているものではないか。人間というものは、そして人間を含め生きとし生きるすべてものは、その内部と外部の間の混合作用が行われている間のみ、この地上で生きていくことができるのではないだろうか。

繰り返しになるが、21世紀の神学には、宗教と自然科学という場所の中で、キリスト教信仰の自己理解という課題をどのように遂行することができるのか、そして、そのために、自分の伝統をどのように新しく理解することができるか、という課題が与えられている。それは、神学の境界をもう一度越えようとする試みであるという点において、従来の神学が歩んできた道、すなわち、神学の内部と外部を跨る道であることは間違いないと言えばその通りであろう。